

## 「込み上げてくる涙」

(2011)

昨年父が98歳で生涯を終えた。胸の奥から込み上げてくる涙がこらえ切れなかった。天寿を十分全うしていた事だし、亡くなった事への涙では無い。在りし日の事・・・父の背中では聴いた「誰か故郷を思わざる」、男同士の触れ合いを教えられた父とのキャッチボール、そしてこの十年間の泣き笑いの介護・・・など等の思い出だ。思い出す度に胸に込み上げてくるものがある。会社生活を長く経験したせい、人前で涙を流す事をグイとこらえる習性が身についてしまっていたことに改めて気付かされた。会葬のお客さんに父のありし日々の事をポツリポツリと喋る時、ジワッと、胸・咽喉の奥から何かが入り込んで来て、涙腺が緩み、思わず声が詰まり始めるが、泣き崩れるところ迄は行かず何とかその場は無事に終えることが出来た。喪主の挨拶の時もそうだった、人前での挨拶には慣れっこの私だが、話の途中でいつの間にかグイグイと込み上げ始め、「アツ・・・来たな」と思うが、そこは流石に落ち着いて、声は幾分込み上げてはいたが、何とかやり遂げた。

思い返せば、自分はもともと「涙もろい」方の部類に入るのだろうと思う。小学生の頃、家で父母とランプや花札や将棋をして遊んだが、これで負けたりすると時々「ウワツ・・・」と突然涙が込み上げて大泣きした憶えが何度かある。父母には「これくらいの事で・・・」と笑われた。負けず嫌いの悔し涙・・・性格的なものなのだろう。

青年期を迎え、大学生になったばかりの頃、同じ下宿先にいた僕より年上の〇しさんという仲になった。青春の甘酸っぱい蜜の味をそれとなく覚え始めた頃だ。僕は必死だったが、年上の彼女はそれ程でも無かったのではないかと今思い返すが、その彼女が嫁入りするという事らしくてその下宿を出て行く事になったその日の朝、二人きりになり、僕に言わせれば必死の別れを経験した。そして大学の朝の授業へ出席するのに、何故か電車に乗らずひたすら六本松への路を歩いた、目から涙がドクドク溢れるのを快感のように感じながら、出るに任せた。通りがかりの人、行き交う電車の客の目は全く気にしなかった、多分遠目に涙は気付かれていないだろうと思っていた。それよりも普段経験する事のないこの大量の涙の快感を体中で感じていたかったのだろう。

結婚して翌年28歳の時、初めての子供の誕生に接した時の事を思い出す。出産予定日の一と月前だったので、会社の同僚・若い者達で一泊の夏の海岸キャンプに行っていた。当時は未だ携帯電話など無い時代、夕方家に帰ってみると「タクシーで産院に行く」との置手紙。すっ飛んで行った産院で出産を終えた妻がベッドに横になっていた、女の子が2500gで無事に生まれていた。妻の顔を見たとき突然「ドツと」ばかりの涙が溢れ出た。サラリーマンの悪い習性で、妻を気遣い・顧みることのなかった日々への反省の涙？ それとも初めての子供という未経験のシーンでの驚きの涙？・・・妻の前だと言う事も忘れ、余りにも

突然の込み上げてくる涙には驚いた。

それ以前、そしてそれ以後は一度たりとも妻の前で涙など見せた事はない。たとえテレビで涙を誘われる場面は幾度となくあるが妻の前では、グツと堪える。それとは逆に一人きりで観ているテレビや映画での哀しい場面になると、一人で思いつきり涙を流す。以前よりは涙もろくなっただろうか？

年をとると涙もろくなるのは年のせいで涙腺が緩んでしまうからだという話がよくあるが、医学的には涙腺が緩むのではなく、目を潤した涙が「鼻涙腺管」を経て鼻に抜けるその配管が詰まるから、しょうがなく涙が目の外に溢れ出してしまうという事らしい。そういえば

もともと涙には副交感神経を優位にする作用があり、脳内ホルモンの一つであるモルヒネ様物質「エンドルフィン」が増加することにより、カタルシス効果、癒し効果、ストレス解消、はては免疫力の向上といった健康効果があるといわれている。よく言われる「女の涙」...

女性が長生きなのもこのせいなのかもしれない。

## 熱帯夜 夢見る犬の涙跡

枯芝に一人で泣きに来る小虫